

## 「啓発グループ活動」による若手薬剤師の育成と組織力強化 ～業務改善、調査研究を通して課題認識から計画・実行・評価・改善のプロセスを学ぶ～

チーム医療の普及とともに薬剤師の活躍フィールドは拡大し、その専門性への評価も高まっている。その一方で、薬剤部の組織力強化と継続的な人材育成が課題としてクローズアップされるようになった。安城更生病院（愛知県安城市・749床）薬剤部では、くすりを通じて安心・安全・信頼の医療を提供することを理念として、その実現のための人材育成に力を入れており、全常勤薬剤師が参加する「啓発グループ活動」を展開。若手薬剤師が指導者やメンバーの支援を受けながら、1年間、業務改善や調査研究のテーマに取り組む。相互に啓発し、成長しあえる環境を整えることで薬剤部の総合力を高める取り組みについて取材した。



薬剤部  
薬剤部長・院長補佐  
すぎうら ようじ  
**杉浦 洋二 先生**



薬剤部  
病棟業務2係長  
なかむら かずゆき  
**中村 和行 先生**



薬剤部  
血液内科・消化器内科病棟担当薬剤師  
しが ゆうや  
**志賀 有雅 先生**

### 人材育成を重視した組織づくりと啓発グループ活動

安城更生病院は、安城市の市民病院の役割と西三河南部圏域の地域中核病院の役割を持つ急性期病院である。薬剤部は1990年代から薬剤師の病棟常駐化を積極的に進め、活躍フィールドを広げるとともに、スタッフの自主的な学びと主体性を大切にしたい人材育成と組織づくりに取り組んできた。その一つが、全常勤薬剤師55名（2019年1月時点）が参加する「啓発グループ活動」であり、若手薬剤師の育成に主眼を置く（資料1）。薬剤部長の杉浦先生はその狙いを次のように説明する。「1年間の活動を通じて、若手薬剤師が課題に計画的に取り組む、評価、改善する思考を身に付けること、それを指導者ならびにグループメンバーが支援することで、相互のスキルアップや意識の向上を図ることを目的としています」

活動がスタートしたのは2015年。当

初は“調査研究”のプロセスを学ぶことを主な目的としていたが、杉浦先生が着任した2017年に方向転換し、調査研究に限らず各スタッフが日常業務の中で興味を持ち、意欲的に取り組めるテーマを対象に、“業務改善”の視点も入れて再構成した。

啓発グループは、目的別に①がん患者支援調査、②医療安全強化、③病棟業務改善、④TDM研究、⑤抗菌薬適正使用研究、⑥医薬品適正使用調査の6グループが編成されている。1グループは8～10名で、リーダー、指導者（係長クラス）、被啓発者（2～5年目の若手薬剤師）、支援者（被啓発者のサポート）の他、新採用1年目はオブザーバーとして参加する。被啓発者、指導者は原則各グループに1名ずつ配置し、取り組みテーマを主体となって進める。支援者はサポーターとして共に考え、協力する役割を担う。

活動スケジュールは、5～6月を計画期間として、被啓発者が取り組むテーマ

や各メンバーの役割を決めたうえで活動計画を協議・決定し、計画書を提出する。7月～翌年2月までを実施期間とし、3月に評価・考察、まとめを行い、4月の成果報告会で終了する。この間、全スタッフ参加による計画発表会と2回の進捗報告会を実施し、活動状況の共有および計画の見直しやブラッシュアップを行う。

杉浦先生が重視しているのが計画立案の過程だ。「日常業務の中で感じている漠然とした疑問や改善すべき課題をクリアにすること、すなわち課題認識を第一歩として、先行研究の調査を含めた現状調査を行います。そこから改善ポイントの明確化、具体的な目標設定までがしっかりできるようになってほしいですね」

### 化学療法によるB型肝炎ウイルス（HBV）再活性化対策

がん患者支援調査グループの取り組み

みを例に活動の実際を紹介しよう。メンバーは10名で、主にがん患者支援に携わる薬剤師が参加している。指導者は病棟業務2係長の中村先生、被啓発者は5年目の血液内科・消化器内科病棟担当の志賀先生だ。2018年度は「化学療法におけるHBVスクリーニングの実施率の向上」をテーマに取り組んだ(資料2)。中村先生はその背景について、「化学療法によるHBV再活性化は劇症肝炎、さらには致命的な経過をたどることがあります。日本肝臓学会『B型肝炎対策ガイドライン』ではHBVキャリアおよび既往感染者のスクリーニングが推奨されており、院内でも周知してきました。しかし、臨床では未実施の例も散見されていることから改善に取り組ましました」と説明する。

計画立案にあたり未実施の原因をグループ内で協議し、課題としてスクリーニングの対象薬剤や実施基準が明確化されていないこと、医師をはじめ医療スタッフへの周知が徹底されていないことを抽出した。次に、志賀先生が中心になって現状の実施率を調査した。2017年10月～2018年3月に化学療法を新規導入した全患者に対し、化学療法施行時点でHBs抗原、HBs抗体、HBc抗体のスクリーニング未実施患者をカルテ上でレトロスペクティブに調査し、その結果を10月のカンサードで報告した。「医師やメディカルスタッフが課題を認識し、改善につながるように、現状調査の結果を分かりやすく、かつ訴求力を持って提示する必要がありました。そのための資料作りが難しかったですね」と志賀先生は振り返る。

次に、解決策をグループ内で検討し、化学療法の新規導入前に、薬剤師がスクリーニング実施の確認を行い、未実施であれば医師に検査依頼をするという運用を構築した。「これは薬剤部だけで構築できることではなく、病院全体の方針として承認される必要がありました。カンサードで提案し了承を得て代表部長会議で周知後、計画通り2019年1月より運用を開始しました」と中村先生は話す。

取材時はデータ集積を始めた直後ではあったが、運用前の実施率57%を大きく上回るデータが得られているという。4月には最終的なデータと評価結果をまとめて成果報告会に臨むことになるが、スライドを用いた成果発表は、若手薬剤師にとってはプレゼンテーションスキルの向上や学会発表の模擬体験の場ともなる。

### 成長し続ける組織へのチャレンジ

啓発グループ活動には様々な学びの機会が組み込まれており、スタッフが相互に啓発し、成長し合える環境作りに寄与している。しかし、杉浦先生はまだ発展途上であり、完成形ではないと言う。2018年度からは新たな取り組みとして、各グループから実行委員1名を選出し、1年間の進行マネジメントを行う機能を追加した。「薬剤部長主導の活動から、スタッフが主体的に企画・運営を行う活動へと発展していったほしいというのが私の希望です」

志賀先生は、被啓発者としての活動は4月に終了するが、すでに次の目標に向けて取り組みを進めている。「HBVス

クリーニング実施率の向上という目標は達成できそうですが、課題はそれだけではありません。啓発グループ活動は終了しても、HBV再活性化対策は継続していきます。また、先輩方に指導してもらったように、次は自分が後進の指導が実施できるように研鑽を積んでいきます」

啓発グループ活動では指導者の育成も目的の一つに位置付けられている。中村先生はどのような課題に向き合ったのだろうか。「活動では指導者と被啓発者が中心となって実務を担う部分が大きいため、その他のメンバーの参画意識を保つための工夫が必要です。そこで、グループ内で課題を共有し、解決策を一緒に考える機会を積極的に設け、ベクトルを合わせました。その一方で、私自身も指導される立場として、組織管理のノウハウや後輩への指導方法をリーダーから学びました。今回の経験を生かして指導者としての幅を広げたいと思います」

杉浦先生が啓発グループ活動で重視しているのは、設定した目標を達成すること以上に、メンバー全員が一つのテーマに取り組む過程で、共に学び、協力しあうことで得られる充実感や満足感の共有だ。「限られた時間の中で、1人でできることには限界がありますが、10人の仲間がいればやり遂げられる。それがグループ活動のメリットです。新しいことにチャレンジしたいと思った時に、一緒に取り組む仲間がいる職場作りによって、成長し続ける組織風土が醸成され、薬剤部の総合力の強化、さらには患者さんへの貢献につながると確信しています」

#### 資料1 啓発グループ活動の概要

##### 啓発グループの種類(目的)

- がん患者支援調査グループ
- 医療安全強化グループ
- 病棟業務改善グループ
- TDM研究グループ
- 抗菌薬適正使用研究グループ
- 医薬品適正使用調査グループ

##### 各グループのメンバー構成(8～10名)

- リーダー：グループ全体の統括 1名
- 指導者(係長)：被啓発者の指導 1～2名
- 被啓発者(2～5年目の若手薬剤師) 1～2名
- 支援者：被啓発者のサポート
- オブザーバー(新採用1年目)

##### 活動スケジュール

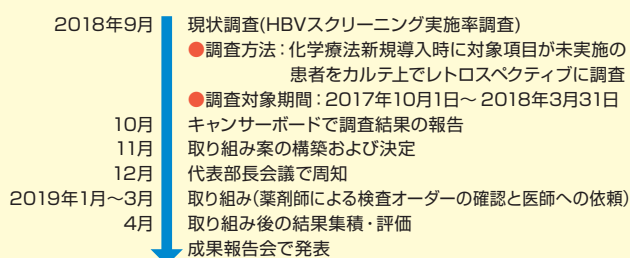


杉浦先生提供資料

#### 資料2 がん患者支援調査グループの取り組み

##### 活動テーマ：化学療法におけるHBVスクリーニングの実施率の向上方法

- ①対象患者：初回化学療法患者
- ②対象項目：HBs抗原、HBs抗体、HBc抗体
- ③スケジュール



志賀先生提供資料